

五輪開催論議

市川 浩

新型コロナウイルス感染者は減少の傾向見られるも、なほ再拡大の恐れ已まざるに、遂に五輪開催式まで一箇月餘を残すのみとなりぬ。その中、開催の是非を巡りて國論二分の狀發生す。其の論議の内容を仄聞するに、開催を否とする論は、本感染症は次々と形態を變じつゝ感染率、重症率共に強化の傾向あり、之まで開發せるワクチンも其の効果疑問視すべく、且つ重症用の病牀逼迫の現状を考ふれば、五輪開催は即刻中止の方針を明らかにすべしとす。一方開催を目指す政府、五輪関係者は、只管安全安心の大會開催に向け、特に各種輿論調査にて大會中止又は延期を求むる聲過半数を超越るを意識してか、失言回避の意識大なるを感ず。

小生は中止を求むる論に一定の理解を示すも、なほ五輪は開催すべしとす。之は昭和十五年東京に開催豫定の第十二回大會返上後、我國は世界の支持を失へるを基本とす。遂に敗戦を迎へ、其の後國民の努力による折角の世界第二の經濟大國もバブル崩潰に再度暗轉し、今や國內總生産は二位中國の半分に満たず、大學世界順位も三十位以内が皆無など、我國の國際的地位の低下も氣にならずや。その上の昨年五輪開催延期なり。世界は日本の舉措を靜かに、しかし嚴しき眼差しを以て注視しをり、今や五輪成功無くして國の發展覺束なし。

反對論の「科學的根據」は新型コロナウイルスの變異種の威力は未解明にして、折角接種のワクチンも效かざる「可能性」大なりとす。而して第二の根據として、五輪開催に伴ふ人出増加による感染擴大の「可能性」を擧ぐ。然るに兩論の「可能性」は「科學的」證據に缺く。特に第二の論は例へば、東京にて實施せられたる、早朝の通勤電車減便による人出削減策は却りて混雑を招き失敗に終りたる「科學的」事實により更に信頼性を減ずるにあらざや。

之を考ふるに、我國にては「科學的」とは科學者の論なれば何人も之に従はざるべからざるの感覺あり。特に政府機關として設立の新型コロナウイルス感染症対策分科會（以下分科會）は當初「この分科會は醫學的見地のみに基く提言を行ひ、其の採用は内閣の專權事項なり」とせり。然るに大衆報道は分科會の提言を「科學的」故に内閣に全面實施を求めて已まず、分科會も之に煽られたるにや、感染症流行下に於ける五輪開催を普通に非ずと闡明す。

此處に於て學例として不適切の譏り招かむを敢て、敗戦直後耳にせるレイテ沖海戦に於ける所謂栗田艦隊「謎の反轉」を想起す。昭和十九年十月二十日、マッカーサー大將麾下の米軍フィリピンレイテ島に上陸す。之に對し聯合艦隊は小澤治三郎中將率ゐる第二遊撃隊を囨役として同本土を出發せしめ、一方栗田健男中將率ゐる第一遊撃隊は戰艦大和、武藏を含み、同二十二日ブルネイを出發して兩隊は同二十五日レイテ灣に突入、陸戰援護を企圖す。戰記によるに、栗田艦隊は出發の翌日同中將坐乗の旗艦重巡愛宕が、翌二十四日には戰艦武藏が敵艦隊に撃沈せられ、遂に二十五日、豫定のレイテ灣突入を斷念、反轉歸投すと云々。然るに當日レイテ灣の敵艦隊は囨の小澤艦隊邀撃に出拂ひて、全くの無防備なりけりとぞ。

レイテ灣突入は同島に上陸せる敵軍への艦砲攻撃なれば、其の主砲たる戰艦武藏を喪ひつるを今日に反映せば、五輪開催を前にしての新型コロナ防疫體制の暗轉に當るとも言ふべきか。されど歴史に「たら・れば」は無く、日本海軍は再び天佑を得ずして敗れつ。菅首相はこの史實をも踏へ、國民を信じて五輪開催を成功せしむべく、我等も何でふ協力せざらむや。

（令和三年六月十二日受附）